

目的 衣服製作にあたって縫合部の縫い目割りの良否は、布地のメーキングアップ性および可縫性の上から、シルエットや縫い目の美しさにも影響するものとして極めて重要である。これまで、布地のメーキングアップ性に関しては、可縫性殊にシームパッカリングについて研究がなされ成果も上がっているが、縫い目割り、特に合成繊維を素材とする布地の縫い目割りの研究は十分ではない。本研究では、合織婦人用服地を用い縫製条件の違いによる縫い目割りの良否を定量的にとらえることを試み、さらに布地の構造や、力学的特性との関係を検討するものである。

方法 試料布はポリエステル100%のもの5種を用い、家庭用ミシンにて縫合後、アイロンにて縫い目を割る。アイロンかけ条件は、家庭用アイロンにより、アイロン温度140～150°、時間10秒、自重(1.45kg/160cm²)とした。縫製条件は、縫い方向タテ、ヨコ、バイヤス、縫い代幅1.0、1.5、2.0cm、針目数4目/cmである。縫い目割り測定は、マイクロスコープにより、縫い目の縫い代の最高高さ(H1)、縫い目の縫い代の端高さ(H2)、縫い目の持ち上がり高さ(H3)を測定した。一方、布地の構造(厚さ)、力学的特性(曲げ剛さ)を測定し、布地の物性との関係を検討した。

結果 縫製条件では、縫い代幅の違いにより縫い代は、大別すると縫い代幅が少ない場合はV型およびU型を呈し、前者は厚い布地、後者は薄い布地に見られる。縫い代幅が多くなると縫い代は一型を呈する。布地の物性との関係では、厚さが増すとH1、H2、H3、いずれも大きくなり、曲げ剛さにおいても同様の傾向が認められる。